

高校化学グランドコンテスト 発表のススメ

東京家政学院大学
学長 鷹野景子



高校化学グランドコンテストとのおつきあいは、このコンテストの生みの親、中沢浩先生（当時大阪市立大学教授）との共同研究打合せ後の雑談から始まりました。「高校生の化学のコンテストを始めたんですよ。お茶の水女子大学（当時の私の勤務先）も後援に加わりませんか？」とのお誘いに、すぐに大学に話を通しました。高校生の化学への興味を応援する取り組みとあっては、長年化学の研究と教育に携わってきた身からすると、引き込まれるのも自然なことでした。

それ以来、ほぼ毎年審査委員として参加させていただいていますが、発表では、同じテーマはありません。時に、部活動として後輩が引き継いだテーマについての発表がありますが、参加校も広がり、毎年のテーマの広がりを楽しみにしています。男子生徒のグループ、男女混合グループ、時として単独で研究と発表をこなす強者もいます。一人で発表するのは、男子が多い印象です。女子高生の活躍も目覚ましいものがあります。

私自身は、高校生の時、当時身近な存在ではなかった「コンピュータ」と、「プログラマー」という新しい職業への憧れから、数学科への進学を考えました。しかし、大学での数学は「哲学的」と聞いた私は、私の方向性とは少し違うと感じ、小学生の頃から何となく好きだった理科（化学）の道を選びました。ところが、大学に入ってみると、数学寄りの化学分野があり、自然にその道へと導かれました。その後わかったことは、一つの科目の知識だけで成り立つ学問分野、研究分野はない、ということです。

また、この経験から、進む道の岐路に立った時、その時点での一番望む道でなく、第2希望、第3希望の道だったとしても、また次の岐路で道が拓けることもあるし、希望の方向に軌道修正していけば良いのだと気づきました。ノーベル化学賞を受賞された白川英樹先生も、研究室配属で第一志望でない研究室に進んだけれども、その時の学びがノーベル賞に繋がったと述べていらっしゃいます。

高校生の皆さんには、わずかな興味でも、やってみよう、と思えることに、まずは取り組んでほしいと思います。小さな一歩を踏み出してみましょ。それが次のステージにつながっていきます。その興味が、少しでも理科に関係することでしたら、この「高校化学グランドコンテスト」で発表してください。質疑応答から得られるもの、そして異なる学校で学ぶ仲間との出会いが、あなたの人生を広げてくれるはずです。

